

糸満盛成氏資料

1 資料について

提供日：2019 年 8 月 31 日

提供者：糸満盛成氏(那覇市在住)及びその家族

内 容：糸満盛成氏が学童疎開時に受け取った手紙やハガキ類

点 数：手紙 25 点 はがき 44 点 計 69 点

2 糸満盛成について

盛成氏は、1931 年(昭和 6)10 月 12 日生まれ。現在 88 歳。首里第二国民学校高等科 1 年時の昭和 19 年に熊本県へ疎開し、熊本県葦北郡水俣町葛度あしきたぐんみなまたちようくずわたりの葛渡国民学校に編入された。

父親は沖縄戦以前に亡くなっており、母親と兄弟姉妹は南洋及び沖縄戦で全員戦死した。終戦直後は鹿児島にとどまり、昭和 22 年に沖縄に戻っている。

3 手紙やハガキの内容

(1) 友人や引率教員からの手紙やハガキ

一緒に疎開した同級生や年上、年下、幼なじみからの手紙やハガキ。

最初の頃は、友人同士で誰がどこにいるのかを知らせあったり、連絡先を尋ねたりする内容が多い。これは同じ学校でも、異なる場所に分散して疎開していたためだと思われる。その後は学校や宿舎での様子、勉強・受験のこと、作業やご飯の話題などもよく出てくる。

沖縄の話題では、沖縄が 10・10 空襲や地上戦で壊滅したことを受けて、

「敵米英は物量を頼みにどーどー反攻して来る。遂に我が故郷である沖縄島も遂に玉砕してしまった。」

「もとは遊んだ町も今は時局は変わっています。また光栄の来る時楽しみに日々の暮らしして行きましょう。」

「帰ったら沖縄のかたきを取ろう。」

といった文章も見られる。

川崎で働く幼なじみからの手紙では、「生産増強に励んでいます。」とある。彼女達の手紙にも、「どんなに家の母や姉が恋しくても歯をくいしばって勝利の日までお互いに一丸となって行きましょうね。其の悲しみも楽しみも乗り越えてこそほんとの盛ちゃんたちは日本男子ですよ。きっとあの沖縄を取り返しましょう。」などと勇ましい言葉が並ぶ。

皆、遠く離れた地から沖縄の事を想い、懐かしく遊んだ日々を思い出したりして、いつか沖縄に帰ったら・・・という希望の言葉を多く手紙に書き記しているのが特徴的である。

帰郷が近づくと、「沖縄に帰へれるとの事、ほんとに嬉しいですね。」という手紙や、引率教員から帰るまでに必要な衣類やお金などに関する事など、帰郷準備のための事務連絡的な手紙も受け取っている。

(2) 家族・親族からの手紙やハガキ

義姉サダや母オトが何度も手紙を送っている。「寒くて大変でしょう」といった盛成氏の体を気遣う内容や、物資を送りたいが、学校でまとめて送るので簡単ではないということが書かれており、離れて暮す盛成氏を心配している様子うかがえる。

また、沖縄の様子、特に 10・10 空襲の様子は「那覇の都会があの米英の為にやけのが原になってゐますよ。」などとその日の様子が記されており、家族や親戚は大丈夫だから心配しないようにと綴っている。

オトは、盛成氏に「体が丈夫でいることが何よりも親への孝行だ」ということを何回か記している。

戦後になると、本土に住んでいる親族からの手紙が何度か届いており、家族を亡くした盛成氏の身を案じる様子うかがえる内容となっている。

以 上